

10 読者のひろば

漢詩紀行：元旦の風景

藤野 仁 三*

今年の正月は神社に参拝した人が増え、リゾート地で新年を迎えた人は少し減ったという。筆者は出不精で、元日はいつも近くの王子稲荷神社に詣でる。

王子稲荷の歴史は古く、稲荷神社の関東総公司であった。伝承によると、大晦日に関東八州から神の使いの狐が一本の榎の木の下に集まり、そこで衣装を整え除夜の鐘と共に王子稲荷に向かったという。広重の浮世絵に参詣前の狐の図がある（写真）。

今日では、善男善女が狐の面をかぶり王子稲荷を参詣する。多数の人が参加するがそれほど騒々しくない。静かに新しい年の到来を迎えるという日本の伝統がそうさせるのであろう。

元日詣王子稲荷神社

昨夜鐘声除旧歳 昨夜鐘声 旧歳を除き
今朝狐面賀新年 今朝狐面 新年を賀す
社祠拝礼瞳瞳日 社祠拝礼す瞳瞳たる日
祈願安寧献賽銭 安寧を祈り賽銭を献ず

七言絶句先韻（年・銭）

今回の漢詩は、狐の行列が解散して初日が差すころおもむろに参拝にかけた様子を詠んだもの。冒頭2句が対句なので、一句は韻を踏んでいない。瞳瞳たる日とは初日をさす。

この漢詩は、北宋の王安石（1021～1086）の七言絶句を手本としている。文章家として唐宋八大家の一人であり七言絶句の名人でもある王安石は当時の元旦の風景を次のように詠んでいる。

元旦

爆竹声中一歳除 爆竹の声中一歳を除き
春風送暖入屠蘇 春風暖を送り屠蘇に入る
千門万户瞳瞳日 千門万户 瞳瞳たる日
総把新桃換旧符 新桃を総て旧符に換える

この詩から、中国では1000年も前から元旦に爆竹を鳴らしてお祝いしていたことが判る。そのあと春風が暖気をお屠蘇の中に運んできて、初日が差す頃になるとどこの家も古い魔よけのお札を新札に替えている、と詠んでいる。現代でも春節には赤い対聯を門に貼る家があるという。屠蘇（元旦に飲む薬酒）、爆竹（魔よけ）、春風、新桃（魔よけ）など正月にちなんだお目出度い言葉をならべ、元旦風景をほうふつとさせている。

賑やかに元旦を迎えるのは中国だけではない。筆者が仏アルプスのスキー場で新年を迎えたとき、ホテルの周辺が花火や歓声で眠れなかったことを覚えている。後で聞いたところでは、路上で人々は誰彼かまわず抱擁して新年の到来を祝福すると聞いた。ホテルで寝ている場合ではなかったと悔いても後の祭りであった。元旦のスキー場では終日スキー客が「ボナーー！」（おめでとう）と互いに挨拶を交わす風景は気持ちのよいものであった。



安藤広重・名所江戸百景
「王子装束系の木 大晦日の狐火」（1857）

*東京理科大学専門職大学院 教授